

〈論文〉

志村延命寺・前野町東熊野神社・志村熊野神社の 石造物調査

—板橋区志村地域におけるフィールドワーク授業の実践例—

遠藤 ゆりこ

要約

本稿は、板橋区志村地域を対象とするフィールドワークを取り入れた授業「日本地域史」の概要と意義をまとめ、新たに確認された石造物（板碑・五輪塔）の詳細と石造物の現況報告を行ったものである。従来から、板橋区には中世の板碑が多く伝来することが知られている。だがそれらは移動することも多く、既存の調査報告と現況が異なる事例が見られた。そのため、志村延命寺・東熊野神社・志村熊野神社の三ヶ所について、従来の報告書と対比しながら現況を把握した。その結果、志村延命寺で板碑4基・五輪塔4基、東熊野神社で板碑1基・志村熊野神社で板碑片2基を新たに確認できたため、詳細を報告することとした。授業では、調査や分析手法などを指導し、学生が工夫しながら調査を行い、文献を収集し、分析を加えて報告書を作成した。本稿は、学生が自ら歴史的発見を体験し、主体的な学びの成果としてまとめた報告書を踏まえて執筆したものである。

キーワード

板橋区志村 板橋区前野町 板碑 五輪塔 フィールドワーク

はじめに

本稿は、淑徳大学人文学部歴史学科の2017年度（前期）の授業「日本地域史」で行った、板橋区志村地域を対象としたフィールドワーク調査の成果と、フィールドワークを取り入れた授業の意義をまとめたものである。本授業は、板橋区内の一地域の歴史を追究することを通して、歴史学を学ぶ手法を身につけ、歴史を学ぶ意味を考えることを目的としたものであった。開講初年度の2017年度は、本学部キャンパスの徒歩圏内である板橋区前野町・志村・常盤台地域を考察の対象に据えた。具体的には、当該地域のことを知る上で不可欠な要素、①石造物、②熊野信仰、③志村城址、④田園都市、この4つの観点から考察を加えることとした。

荒川沿いに位置する板橋区は、都内でも中世の石造物「板碑」が比較的多く所在することで知られている。そのため、まずは板碑をはじめとする中世の石造物に注目した。板橋区の石造物については、これまでも何度か調査が行われ、それらの成果は『板橋区史』（板橋区、1954年）、『東京都板碑所在目録（二三区分）』（東京都教育委員会、1979年）、『いたばしの石造文化財（その二）板碑』（板橋区教育委員会、1980年、以下『板碑』と略記する）、『板橋区史 資料編2 古代・中世』（板橋区、

1994年、以下『板橋区史』と略記する)に収められている。

だが、板碑などの石造物は、屋外に置かれている場合が多く、容易に移動できるため、しばしば所在が確認できなくなることや移動することがある。『板橋区史』でもかつて存在したはずの板碑が現存しない事例が報告されている。このような石造物の特徴に鑑み、授業では改めて板碑などの石造物の現況調査を行い、現状を報告してその意義を考えることを主な目的とした。調査を実施した場所は、前野町の東熊野神社(前野町3丁目)、延命寺(志村1丁目)、志村熊野神社(志村2丁目)の3箇所である。しかし、現況把握を第一の目的として始めた調査であったが、いずれの寺社でも新たに数基の石造物が確認された。それらについても、本稿で報告をしておきたい。

なお、本授業を履修した学生は、2～4年次生までの合計18名である。また、「日本地域史」の授業では、学生が授業の成果を整理し、分析を加えた報告書『板橋の歴史をあるく—前野町・志村・ときわ台地域—』(詳細は後述)をまとめており、本稿はそれに基づくところが大きい。

以下、授業の概要をまとめた上で、石造物調査の成果について述べていくこととしたい。

1 授業の概要

(1) 調査に入る前に —研究状況の把握と調査準備—

まずは講義形式の授業で板橋区全体の歴史を概説し、本年度の授業で注目したい志村・前野町・常盤台地域の特色と、特に調査を実施したい石造物が所在する寺社の解説を行った。調査対象とした寺社と石造物については、筆者が事前調査を行うとともに、板橋区教育委員会文化財係生涯学習課の吉田政博氏の協力を得て、事前に調査の許諾を得た。授業の事後・事前学習としては、板碑・五輪塔について調べてワークシート(図説付きで板碑・五輪塔を解説するための用紙)を完成させること、また、石造物調査以外に、当該地域で調べてみたい歴史的事象を考え、その概要と調べたい理由をプレゼンテーションすること、この2つを課した¹。

次に、2週にわたって学生によるプレゼンテーションを実施し、それらを参考にして自分が最も参加したい調査に投票し、授業での調査対象を決定した。投票の結果、志村城址・熊野信仰・常盤台の田園都市、これらの3件が採択された。そこで、学生の希望にできるだけ沿って、①志村延命寺、②前野町の東・西熊野神社、③志村城址と志村熊野神社、④田園都市ときわ台の4つのグループに分けることとした。

その後は、グループごとに本調査に入る前の事前準備を進めた。具体的には、①～④のうち担当する課題に関する文献を収集し、研究史を整理してその把握に努めた。また、板碑に関しては、調査時に使用するための資料カードを作成した。資料カードとは、『板橋区史』の該当部分をコピーし、板碑1点ごとの情報をカードに貼り付けたものである。現況調査時に照合する際、また新たな情報を書き込む際に利用した。

事前準備と並行して、全履修学生が志村地域の特色を理解し、実際に板碑を見学するためのフィールドワークを実施した。その際は、板橋区教育委員会文化財係生涯学習課の畠山聡氏を講師に招き、詳細な解説をしていただいた。主な踏査地は、志村城址・志村延命寺・志村一里塚・小豆沢龍福寺・小豆沢神社である。畠山氏の解説を聞くことで、学生は理解を深めるとともに、より関心を強くもって調査に臨むことができたと思われる。

本調査はグループごとに行い、①～③の石造物調査は筆者の指示・監督の下で実施した。①～③の調査に同行するため、それぞれ別の日に課外授業を設定する必要があり、やや教員の負担が大きくなってしまったことは、今後改善すべき課題であろう。以下、各グループの本調査の概要を述べておきたい。

(2) 本調査の概要

① 志村延命寺の調査

実施日は2017年6月2日(金)で、参加した学生は、岩田芽依・小池優士・坂本和希・須田光輝・廣瀬薫(全て2年次生)の5名である。延命寺での調査対象は、板碑群と五輪塔4基であったため、板碑班と五輪塔班の2班に別れて調査を行った。調査の過程で班員の移動はあったが、基本的に板碑班は小池・須田・廣瀬の3名、五輪塔班は岩田・坂本の2名であった。まず、延命寺境内図に石造物群の位置を示した上で、板碑と五輪塔が、それぞれどのように配置されているかを示す図を作成した。

板碑については、前述のように既に研究があるため、資料カードを使って従来の研究成果と照らし合わせ、現況を観察した。『板橋区史』段階では確認できなかった板碑がいくつかあり²、それらが配置図上でどこに位置するかを確認した。その上で、新たに確認できた板碑については法量を図りながら図面を作成し、拓本を採取して銘文を読み取った。既に『板橋区史』で確認できる板碑については、法量は計測していないが、所在と現況を観察して資料カードに記入した。

五輪塔は、従来の研究では存在が知られておらず、今回初めて調査が実施された。4つの五輪塔に番号を付して配置図に示し、現地で番号ごとに資料カードを作成した。法量を図りながら図面を描き、銘があれば拓本を採取し、銘文を読み取った³。

② 前野町熊野神社の調査

実施日は2017年6月9日(金)で、参加者は及川叶恵(3年次生)・久保田龍馬(2年次生)・越坂隼(2年次生)・若旅寿来(3年次生)である。前野町には、東熊野神社と西熊野神社の2社の熊野神社がある。現在、何れの熊野神社にも、境内には町内にあった江戸時代の道標をはじめとする石造物が集められている。

東熊野神社では、まずそれらの石造物の配置状況を境内図に示した。その上で、筆者による事前調査で新たに確認された板碑の調査を実施した。具体的には、資料カードを作成し、現地で板碑の図面をとって法量を図り、拓本を採取して銘文を読んだ。

一方の西熊野神社は、調査を実施した期間に工事が行われており、境内に入ることができなかった。そのため今回は、外観のみを確認した。

③ 志村城址と志村熊野神社

同地の調査は、志村城址・熊野信仰・熊野神社の絵馬について調べることを希望した齋野平蘭・橘倭人・出口美朋・星知里・吉田宙晃(全て3年次生)の5名が、2017年6月9日(金)に実施した。

『板橋区史』によれば、志村熊野神社には3基の板碑が存在する。だが今回、それらの板碑の後ろ側に、板碑片と思われる板状の緑泥片岩2基を確認することができた。板碑3基および板碑片2基を計測し、板碑については銘文を確認して観察を行った。板碑3基の情報は資料カードに記入し、板碑片は図面を作成して必要事項を記した。

志村熊野神社を中心とする地域には、中世の志村城があったと伝わるが、城跡であったかは定かではないという⁴。神社本殿西側の土塁跡・堀跡とされる部分を踏査したが、夏場で草木が生い茂っていたこともあり、土塁状になっていることは確認したものの、その形状は明確ではなかった。

絵馬殿と殿内の絵馬については、調査の準備が不十分であったため、今回は絵馬の閲覧のみとし、今後の課題とした。

④ 田園都市ときわ台

田園都市をキーワードにときわ台の近代化を検討したグループには、小池登夢・福本広大・山岸俊太郎(全て2年次生)・吉原季輝(4年次生)が参加した。当初は、昔のときわ台住宅に詳しい方から、お話を聞く案も提案されたが調整が難しかったため、今回は古いときわ台の写真を収集し、現在の景観と比較検討することとした。実施日は2017年6月2日(金)と6月9日(金)である。

(1) でも触れたが、このグループの調査には筆者は同行せず、学生のみで進めた。古写真や情報収集は板橋区公文書館にて行ったが、想定していたよりも昔の写真が少なかった。そのためときわ台駅前周辺の写真をいくつか収集することとした。公文書館において得た情報等をもとに、現在の状況を確認し、観察をして現況を写真に収めた。

(3) 調査の後で — 報告書の作成 —

まずは各グループ内で、調査で得た情報を共有し合った。その上で、各グループの成果を他のグループとも共有するため、パワーポイントを使用して、学生による調査成果のプレゼンテーションを行った。各グループのプレゼンテーションについては、ループリックを利用して学生自身も評価を加えた。各グループに対する学生からの評価、および教員によるループリックを使った評価は、各グループの学生全員にコピーを渡し、振り返りを行った。

また、レポート課題に代替するものとして報告書を作成することとし、各グループの話し合いで執筆の分担を決めて作業を進めた。報告内容は、研究史の整理、調査成果のまとめ、調査の成果と研究史を照らし合わせた上での考察、この3点を中心とした。

報告書作成の過程では、グループごとに中間報告書を筆者に提出することとし、筆者が内容を確認し、校正を行った。その際は、できるだけ執筆者の意向をくみつつ、明らかな誤りや、文献の引用の仕方について適宜指導を加えるに止めた。報告書作成にあたっては授業時間も利用したが、事前・事後学習として執筆するグループもあった。

最終的に、全てのグループが作成した報告書を1つに合せて、『2017年度日本地域史報告書 板橋の歴史をあるく—前野町・志村・ときわ台地域—』(2017年、以下『報告書』と略記する)として冊子にまとめることができた。なお、『報告書』の構成は次の通りである。

【『報告書』の構成】〔括弧内()は執筆者名〕

はしがき(遠藤ゆり子)……………i～iii頁

延命寺の板碑(須田光輝・小池優士・廣瀬薫)……………1～10頁

はじめに／1 延命寺／2 板碑の現状／3 板碑の調査方法／おわりに

延命寺の五輪塔の調査結果(岩田芽依・坂本和希)……………11～16頁

はじめに／1 五輪塔の概要／2 全体の様子／3 現在の状況と考察／4 五輪塔の計測結果／おわりに

延命寺五輪塔の梵字について(岩田芽依・坂本和希)……………17～19頁

はじめに／1 梵字の概要／2 梵字の解説／おわりに

前野町の熊野神社(及川叶恵・久保田龍馬・越坂隼・若旅寿来)……………20～23頁

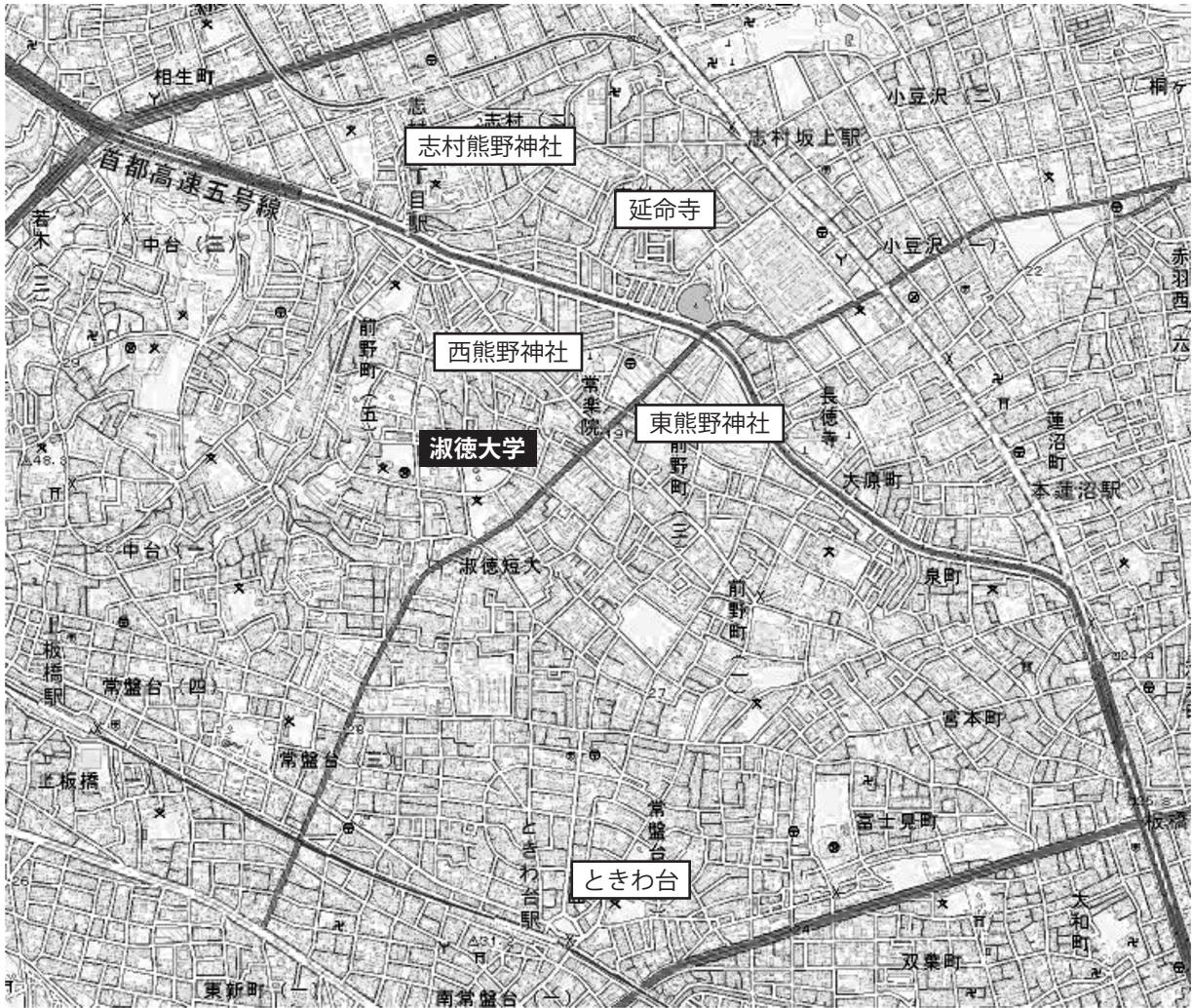
はじめに／1 熊野信仰について／2 東熊野神社／3 西熊野神社／おわりに

志村熊野神社と板碑(齋野平蘭・橘倭人・出口美朋・星知里・吉田宙晃)……………24～32頁

はじめに／1 熊野神社／2 志村城跡／3 志村氏／4 熊野信仰／5 板碑／おわりに

田園都市ときわ台(小池登夢・福本広大・山岸俊太郎・吉原季輝)……………33～36頁

はじめに／1 田園都市とは／2 ときわ台の特色／3 過去と現在の比較／おわりに



(「ウォッチーズ」(国土地理院、watchizu.gsi.go.jp/, 2017年取得) より作成)

【地図：調査先の所在地】

	3	2	1	0
伝わりやすさ	各節の内容が明確で、整理されている。構成がしっかりしており、順を追ってわかりやすく説明がされている。	各節の内容がある程度明確である。内容もわかる。だが、改善が必要である。	各節の内容があまり書かれておらず、説明も不十分である。理解できた所もあるが、分からない所もあった。	各節の内容について必要な説明がなく、理解できなかった。
質問への対応	よく調べてきており、質問にも全て解答できている。また、解答は、著者の考え方と自身の意見を腑分けして答えている。	調べてきており、質問にある程度解答できている。また、解答は、著者の考え方と自身の意見を腑分けして答えている。	調べてきており、質問にある程度解答できている。解答は著者の考え方と自身の意見を腑分けして答えていない。	調べてきておらず、質問にほとんど解答できていない。
チームワーク	とてもよく協力し合い、各自がそれぞれの仕事を行って、グループに貢献している。	1人～2人を除き、協力し合っている様子がうかがえる。	2～3人ほどの者に仕事偏っており、協力し合っている様子がうかがえない。	協力し合っている様子が全く見られない。
声の大きさ・早さ・姿勢	言葉の選択に誤りがなく、声の大きさ、話すスピード、間の取り方も聞き手を意識して適切である。	言葉の選択、声の大きさ、スピード、間の取り方、聞き手への意識のいずれかに改善すべき点がある。	言葉の選択に誤りが多く、声の大きさ、スピード、間の取り方、聞き手への配慮にも問題がある。	言葉の選択、声の大きさ、スピードが不適切で、聞き手への配慮もない。
自由記述：				

【プレゼンテーション用のルーブリック⁵⁾】

このようにして出来上がった『報告書』は、調査でお世話になった方々へもお送りした。その際には、学生が認めたお礼状を添えている。

授業の概要は以上の通りである。次に、本授業の調査・分析によって新たに確認された石造物について、『報告書』を引用しつつ、順を追って見ていくこととしたい。

2 志村延命寺の板碑・五輪塔調査

見次山延命寺は、大永4年(1524)、小田原北条氏と扇ガ谷上杉朝興の戦いの中で志村城が落城した際、城主篠田五郎の家臣見次権兵衛が、子息権太郎の討死のために世の無常を知り、創建したと伝える真言宗の寺院である⁶。開山の頼眞は慶長18年(1613)に死去したという。

以下、同寺の板碑・五輪塔について、調査の成果をそれぞれまとめていくこととする。

(1) 板碑の調査

延命寺は多くの板碑があることで知られ、『板橋区史』にも27基が掲載されている。ただ、今回の調査では境内には23基を確認できるとどまる一方、『板橋区史』に見えない板碑9基の存在が認められた(一基は、『板碑』に掲載されている年未詳の板碑か)。だが、それら9基のうち5基については、既に2015年度の板橋区教育委員会による調査で確認され、区の文化財に指定されて『板橋区文化財年報12』に載る(以下『年報』と略記する)⁷。そのためここでは、境内における板碑の所在地と、板碑群の配置図を示し、『板橋区史』『板碑』『年報』の対応表と、それらがどこに配置されているのかを明確にすることとしたい。また新たに確認された板碑片についても考察を加えていく。



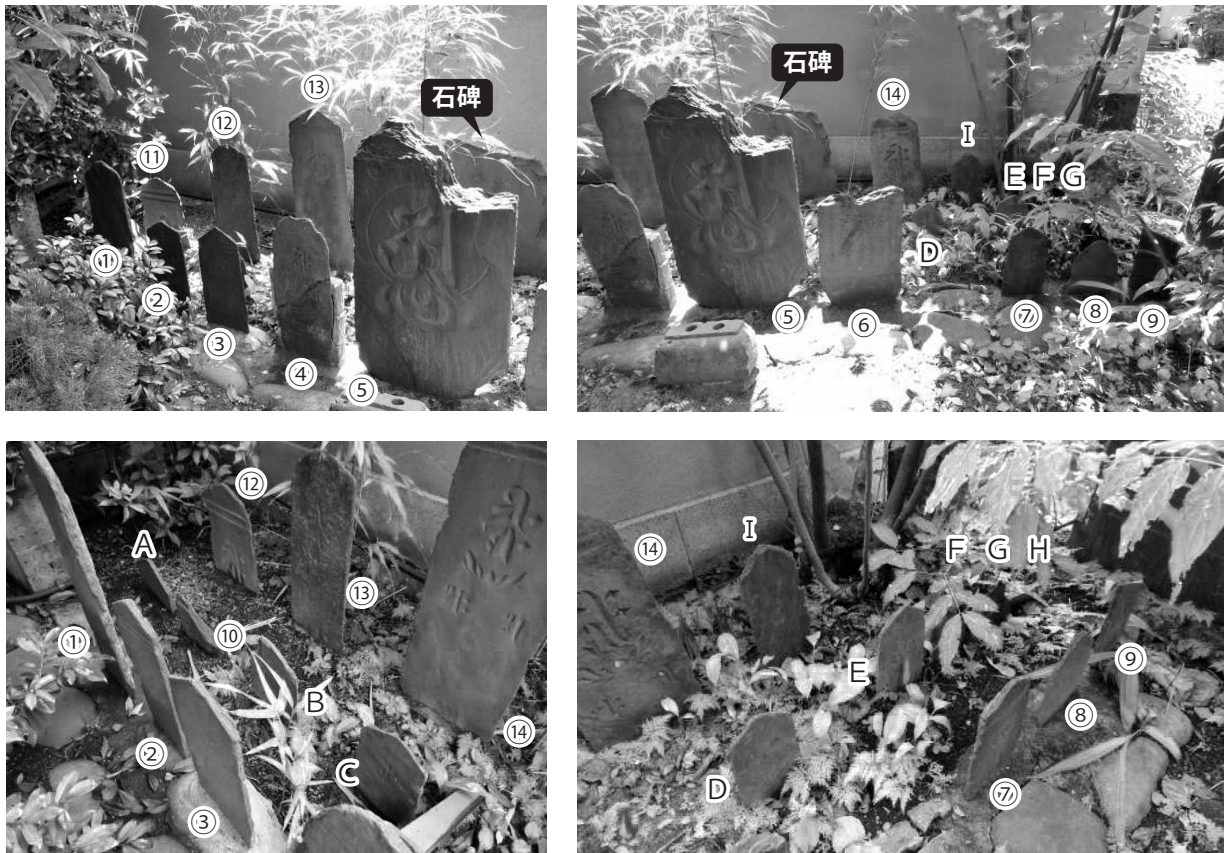
①～④＝五輪塔

- ・岩田芽依・坂本和希「延命寺の五輪塔の調査結果」(『報告書』所収)をもとに作成
- ・『報告書』は『住宅地図 東京都板橋区』ゼンリン、2014年より作成

【図1：志村延命寺境内における板碑群・五輪塔の位置】

『板橋区史』掲載分は①～⑭、同書未掲載分はA～Iである。A～Iのうち、A・F・G・Hは『年報』にも載っていない板碑片である¹¹。また、表の備考にも記したが、③・⑨・⑩は『文化財』段階では延命寺墓地にあり、⑭は『文化財』だけではなく『板橋区史』でも延命寺墓地に所在したとある。また建武5年(1338)10月の板碑は、今回の調査では確認できなかった。このように、近年においても板碑の移動があったことが知られる。

板碑の多くは下部をコンクリートで固定されているが、塀に向かって奥へと横3列に並んでいるなかで、2つ目の横列に位置する9基のうち8基(配置図のA～H)が、土中に埋められていた。このような状況から、2列目の板碑群は、板碑群を一度コンクリートで固定した後、他所より移動してきた追加分であると考えられる。この2列目の板碑は、⑩以外は1994年刊行の『板橋区史』に掲載されておらず、それ以降に移されたことがわかる。なお、『報告書』のIの情報が間違っていたため、本稿で訂正を加えた。



(2017年撮影)

【写真1：志村延命寺の板碑群】

7



(須田光輝・小池優士・廣瀬薫「延命寺の板碑」『報告書』をもとに作成)

【図2：板碑群の配置図】

【表：板碑の配置状況と各書籍の対応表】

図2の 番号	年号	西暦	月	日	種子・銘文	高さ (cm)	幅 (cm)	厚さ (cm)	『板碑』 No.	『区史』 No.	『年報』 No.	備 考
①	宝徳2	1450	3	13	阿弥陀一尊種子	67.0	20.6	2.5		169		法量は『区史』による
②	貞和3	1347	5	10	阿弥陀一尊種子	45.3	17.3	2.8		63		法量は『区史』による
③	貞和3	1347	3		阿弥陀一尊種子	47.8	19.3	2.1	33	62		法量は『区史』による ※『板碑』では延命寺墓地に所在
④	文明19	1487	3	2	阿弥陀三尊種子	54.8	21.9	2.0	102	213		法量は『区史』による
⑤	建長4	1252	6		胎蔵界大日一尊種子	89.0	68.0	7.0	1	1		法量は『区史』による
⑥	文明6	1474	2	23	月待供養	51.0	31.3	3.8	92	192		法量は『区史』による
⑦	康暦3	1381	6	3	釈迦一尊種子	32.0	17.0	2.2		103		法量は『区史』による
⑧					阿弥陀三尊種子	26.3	19.3	2.9		315		法量は『区史』による
⑨	康永2	1343			阿弥陀三尊種子	32.5	19.5	2.0	32	58		法量は『区史』による ※『板碑』では延命寺墓地に所在
⑩					阿弥陀三尊種子	19.0	21.5	3.5		328		法量は『区史』による
⑪					阿弥陀仏種子	39.3	27.9	2.3	145	303	⑦	法量は『区史』による ※『板碑』では延命寺墓地に所在
⑫	延文4	1359	11		阿弥陀一尊種子	60.9	21.2	2.0		77		法量は『区史』による
⑬	永徳3	1383			阿弥陀三尊種子	80.0	27.0	2.7		108		法量は『区史』による
⑭	弘安6	1283	1	6	阿弥陀一尊種子	61.3	26.7	2.9	3	5	①	法量は『区史』による ※『板碑』『区史』では延命寺墓地に所在
A						18.0	25.8	2.0				
B	応永33	1426			阿弥陀一尊種子	26.0	18.8	1.1			③	法量は『年報』による
C	文明15	1483	9		阿弥陀三尊種子	29.0	16.0	2.3			⑤	法量は『年報』による
D	享徳	1452 ~55	2		阿弥陀一尊種子	28.1	14.7	1.5			④	法量は『年報』による
E	康暦2	1380			阿弥陀一尊種子	28.8	16.5	2.1			②	法量は『年報』による
F						15.2	17.4					
G						15.9	19.4		143カ			『板碑』は高さ16×幅19(cm) とする
H						8.0	20.5					
I	永正13	1516	2	16	阿弥陀三尊種子	43.0	17.0	2.1			⑥	法量は『年報』による
	建武5	1338	10		阿弥陀一尊種子	41.7	22.3	1.8	25	48		※今回、所在を確認できなかった

- ・『板碑』=板橋区教育委員会事務局社会教育課文化財係『文化財シリーズ第26集 いたばしの石造文化財—その二— 板碑』(板橋区教育委員会、1980年)
- ・『区史』=『板橋区史 資料編2 古代・中世』(板橋区、1994年)
- ・『年報』=板橋区教育委員会生涯学習課文化財係編『板橋区文化財年報12(平成26年度・27年度)』(板橋区教育委員会、2016年)



【写真2：板碑A】



【写真3：板碑B】



【写真4：板碑C⁸】



【写真5：板碑D】



【写真6：板碑E⁹】



【写真7：板碑F¹⁰】



【写真8：板碑G・H（Gの後ろにHが重なっている）】



【写真9：板碑I】

(2) 五輪塔の調査

これまで知られてこなかったが、筆者による事前調査で組み合わせ五輪塔4基の存在が確認された。そのため、本授業で調査を行うこととした。ただ、住職の斎藤義宏氏によれば、先代の住職が購入した可能性もあるかもしれない、とのお話であった。伝来の経緯は不明であるが、現住職が入寺する以前から同寺に存在したことは確かなようだ。

図1で示したように、①～③の3基は一塊となり、④は少し離れた塀側に置かれている。いずれの五輪塔も地輪の下部が土中に埋まり、特に①～③の3基は埋まり方が深く、土を苔が覆っていた。このような配置の仕方や土中に埋まった様子から、岩田芽依・坂本和希は、延命寺で保管された時期が異なるのではないかと推測している¹²。断定はできないが、五輪塔が現在の場所に置かれた時期や経緯が異なっている可能性はあろう。

なお、4基の五輪塔自体にも苔が付着している状態であった。だが今回は、苔などを含め、現状を維持したままでの調査を延命寺が望まれたため、計測や拓本採取時に五輪塔のクリーニング作業は行っていない。その意味で、特に地輪の高さなどの計測結果や銘文の読み取りには、不十分な点もあると思われる。その点を踏まえた上で、まずは図1に記した番号順に、『報告書』を引用しつつ考察を加えていきたい。



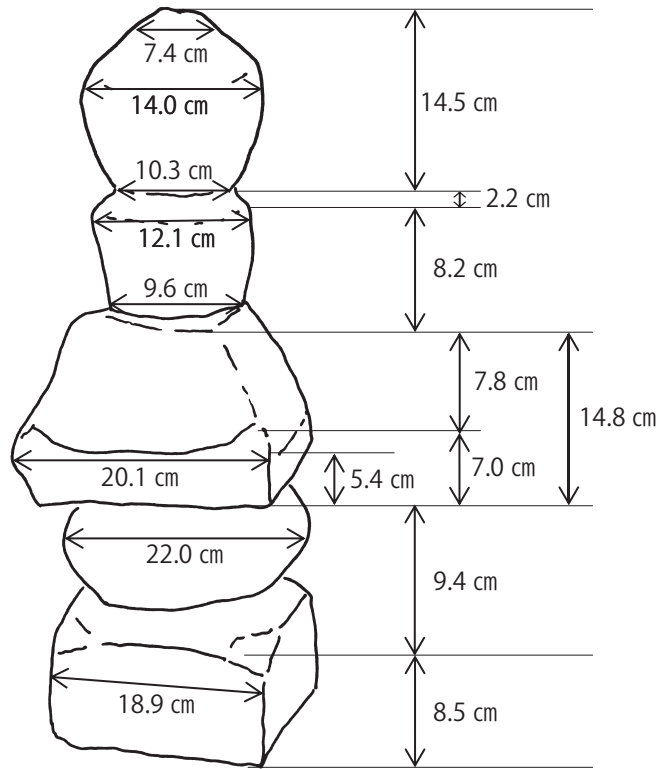
【写真10：五輪塔①・②・③】

① 五輪塔②の考察

全体の高さは57.6cm、最大幅は20.1cmである。空輪の頂部・火輪の軒先部分・地輪の角が欠損し、水輪が横に長い楕円形であることが特徴的である。特に銘文は確認できなかった。写真11・図3からわかるように、空輪は丸みを帯びて頂部も突き出しておらず、火輪の軒先には反りが見られないなど、中世の五輪塔に多い特色が見られた。そのため、『報告書』でも中世(後期か)に作成された可能性を指摘した。



【写真11：五輪塔②】



【図3：五輪塔②の計測図】

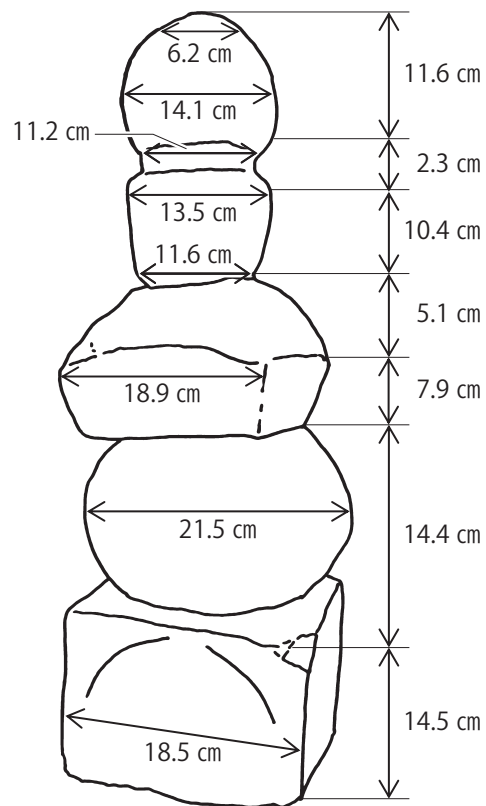
② 五輪塔⑥の考察

全体の高さは66.2cm、最大幅は18.9cmである。空輪の頂部は欠損して丸みを帯びたと思われ、火輪の軒先部分も削れて角が丸くなっている。風化によるものかもしれないが、水輪の大きさに比して火輪がやや小さいと思われる。また、他の3基に比べて水輪が横長の楕円ではなく正円に近く、地輪の角が尖ってしっかりしている。このような形状や風化状態の違いから、上部の空・風・火輪と下部の水・地輪は、別の組み合わせであった可能性も考えられる。

五輪塔⑥の地輪には4面それぞれに月輪を描いた中に梵字が認められた。苔に覆われて解読しづらかったが、延命寺の許可を得て苔を落とさずに拓本を採取した。4面に施された梵字について、南面・東面・北面・西面の順に説明を加えていきたい。



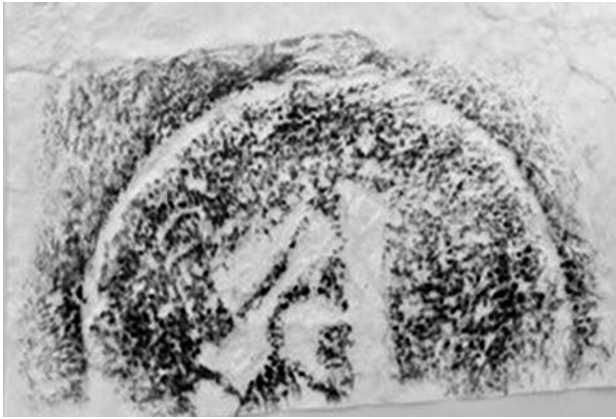
【写真12：五輪塔⑥ 南面を撮影】



【図4：五輪塔⑥の計測図】

《南面の梵字》

三分の一ほどが土中に埋まっていたが、拓本採取によって梵字は少し判読できた。岩田芽依・坂本和希は、「サ」（観音菩薩を表す梵字）であると推察した¹³。ただ、土中に埋まった下部が不明なため、「ア」（大日如来を表す）や「ソ」（弁財天を表す）の可能性も考えられる。



(月輪の直径は、14.8cm)

【写真13：五輪塔⑥南面の梵字】



【図5：梵字「サ」¹⁴】



【図6：梵字「ア」】



【図7：梵字「ソ」¹⁵】

《東面の梵字》

月輪の下部は土中に埋まっていたが、梵字は拓本を採取できた。ただ、苔が覆っていたため判読しづらい部分があった。岩田芽依・坂本和希は「キリーク」（阿弥陀如来を表す梵字）と推測している¹⁶。ただ、大日如来などを指す「アク」と見る余地もあろう。



(月輪の直径は、14.6cm)

【写真14：五輪塔⑥東面の梵字】



【図8：梵字「キリーク」】



【図9：梵字「アク」】

《北面の梵字》

梵字部分も土中に埋まり、苔が多く生えていたため、拓本を採取したものの梵字はほとんど解読できなかった。岩田芽依・坂本和希は、尊勝破地獄真言を表す「ヤ」、もしくは頭の部分に点があることから白衣観音を表す「ハン」ではないかと推測している¹⁷。梵字上方部分から判断するしかないが、「マン」（文殊菩薩）や「エン」（閻魔大王）の可能性もあるかもしれない。後考を俟ちたい。



(月輪の直径は、14.8cm)

【写真15：五輪塔⑥北面の梵字】



【図10：梵字「ヤ」】



【図11：梵字「ハン」】



【図12：梵字「マン」】



【図13：梵字「エン」】

《西面の梵字》

梵字下部がほぼ埋まっており、苔も多いために判読ができなかった。岩田芽依・坂本和希は、明確な推測が立てられないとした上で、右側の「K」のような部分から葉衣観音を表す「ハラ」か、開敷華王如来を表す「アー」の可能性を指摘した¹⁸。他には「サク」（勢至菩薩）や「アク」（図9）と見る余地もあると思われる。



(月輪の直径は、14.9cm)

【写真16：五輪塔⑥西面の梵字】



【図14：梵字「ハラ」】



【図15：梵字「アー」】



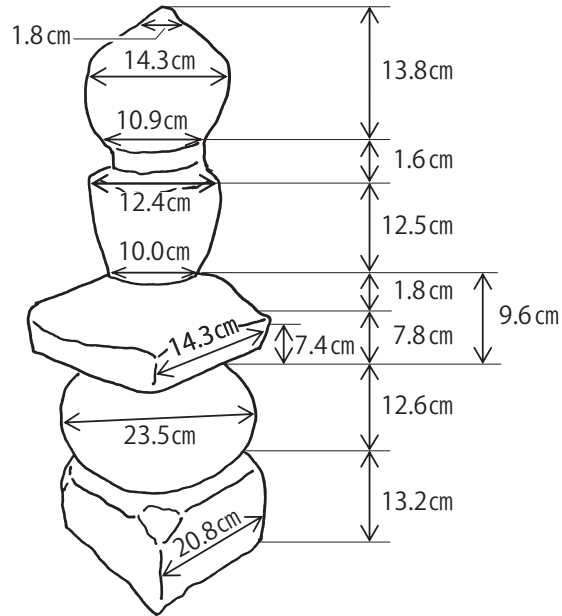
【図16：梵字「サク」】

③ 五輪塔㊸の考察

全体の高さは63.3cm、最大幅は23.5cmである¹⁹。空・風輪の大きさに比べて火輪は高さもなく小さめである。火輪の軒反りが小さいなど、中世に造られた可能性が考えられる。銘文は確認できなかった。



【写真17：五輪塔㊸】



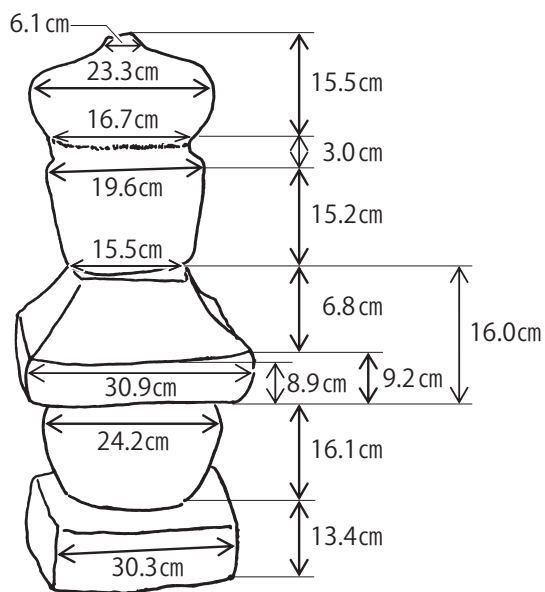
【図17：五輪塔㊸の計測図】

④ 五輪塔㊹の考察

全体の高さは79.2cm、最大幅は30.9cmである。空輪は丸みがなく四角形に近く、頂部が突出している。火輪は他の3基に比べると少し反りがある。全体的に風化による劣化が少なく、形が整っている。これらの特色から、『報告書』でも近世に造られた可能性を指摘した。特に地輪に苔が多かったこともあるが、銘は確認できなかった。



【写真18：五輪塔㊹】



【図18：五輪塔㊹の計測図】

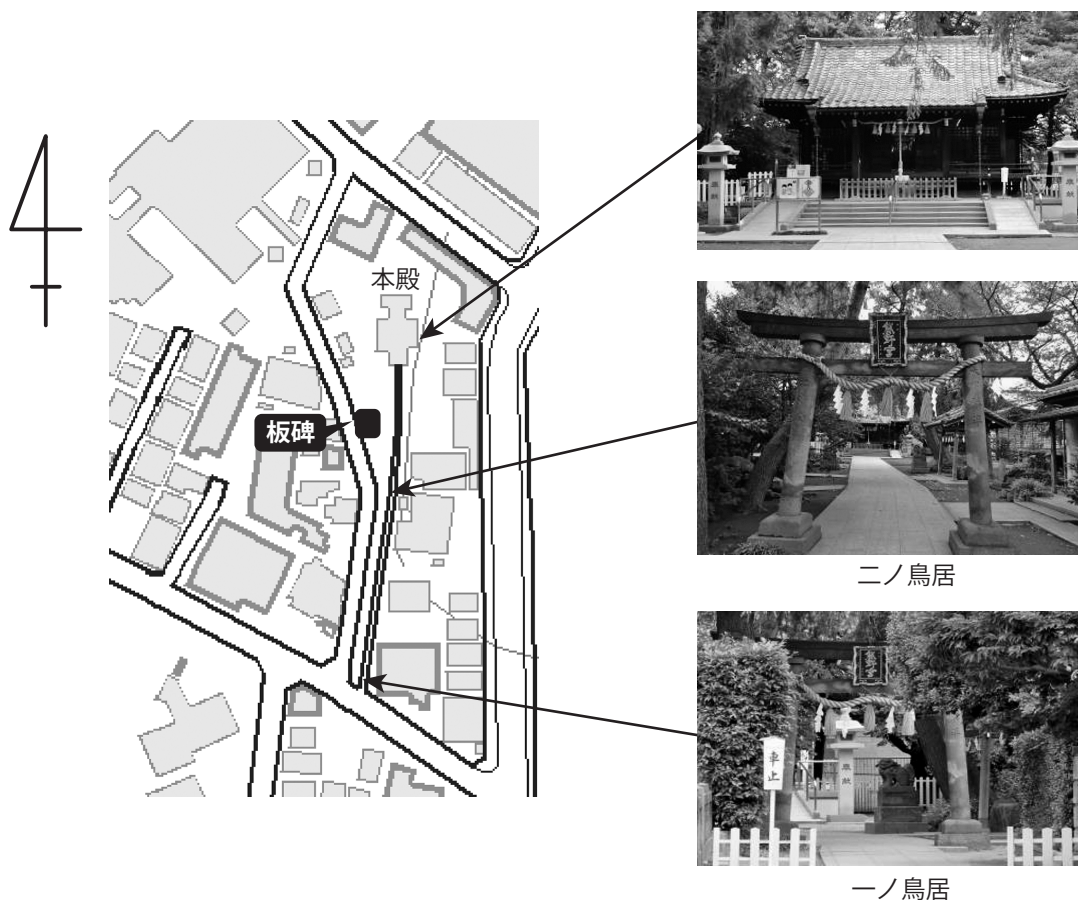
3 熊野神社における板碑調査

現在の板橋区を含む中世の豊島郡では、熊野信仰が盛んであったことが知られている。熊野神社の創建には、紀州出身の商人鈴木氏が関与していたといわれ、入間川をはじめとする河川流域に熊野神社が多く分布するのは、河川流通との関係によると指摘されている²⁰。板橋区にもいくつかの熊野神社があるが、本稿では前野町の東熊野神社と志村熊野神社で新たに確認された板碑について見ていきたい。

(1) 前野町の東熊野神社

江戸時代の前野村（現板橋区前野町）にある、東西2つの熊野神社のうちの1社である。創立年は不詳で、御祭神は伊邪那岐命・伊邪那美命である。

前述のように、板碑は筆者による事前調査で発見され、板橋区では未確認のものであった。板碑は、現在の二の鳥居と本殿の間に位置し、日露戦争（1904～05）を記念する「日露戦役記念碑」銘の石碑近くに建っている（図19・写真19参照）。東熊野神社の神主の方によれば、板碑は「日露戦役記念碑」とともにコンクリート製の土台に立てられていることから、日露戦争前後には東熊野神社境内に存在し、石碑と一緒にここへ建てられたのではないかという。板碑の伝来については、それ以上明らかにすることはできなかった。板碑は写真20でもわかるように、大きく破損しているが破片は確認できておらず、石碑建立時に割れた状態で、現存部分が同地から発掘された可能性も考えられよう。



16

（「ウォッチーズ」（国土地理院、watchizu.gsi.go.jp/、2017年取得）より作成）

【図19：東熊野神社境内における板碑の位置】

現在の板碑の形状は、本来の板碑全体の4分1程度に相当すると思われ、右下部分のみが残されている。高さは40.5cm、最大幅は18.5cm、厚みは厚いところで4.5cm、薄い部分は2.6cmであった。法量は図20の通りである。

銘文が認められたため、同社の許可を得て拓本を採取したところ、中央部分に「月廿日」、右側に「善阿弥」と確認できた。「弥」の下には「陀」の文字があるようにも見たが、判然としなかった。右側面から下方部にかけて線が刻まれており、板碑全体を線刻で囲んでいたものと思われる。



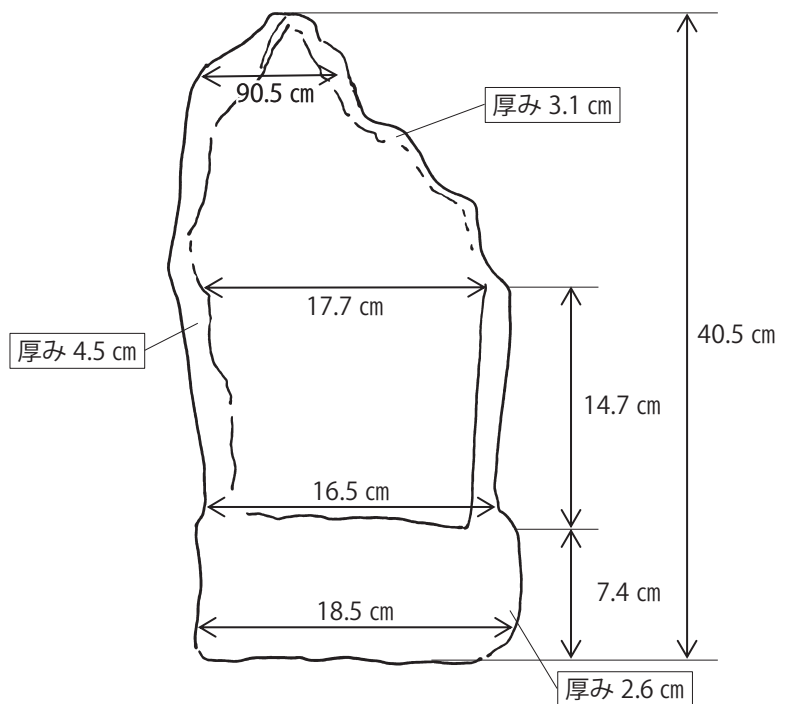
【写真19：「日露戦役記念碑」と板碑】



【写真20：東熊野神社の板碑】



【写真21：板碑の拓本】



【図20：板碑の計測図】

(2) 志村熊野神社

同社は、長久3年(1042)に志村将監が勧請したと伝え、近世には志村・小豆沢・根葉・中台・西台・蓮沼等七ヶ村の鎮守であった。近世の段階で、社地は城跡と伝わっており、延命寺が所持していた²¹。『板橋区史』によれば、3基の板碑があるとされる。それらを含めた板碑群は、図21に示したように神社本殿の東側に位置し、何れも下部をコンクリートで固定されている。

3基のうち大永6年(1526)の銘がある板碑は、柱状のコンクリートに埋め込まれ²²、板碑の正面からみて右の側面に、「大正八年三月熊野神社境内東側ヨリ発掘ノ際、三折セルモノヲ修復ス、昭和六年三月 志考古生」と刻まれていた。少なくとも大永6年銘の板碑は、大正8年(1919)3月に3つに折れた状態で同社境内の東側で発掘され、昭和6年(1931)にコンクリートに埋める修復作業を施されて、発掘された場所からほど近い現在地に建てられたことがわかる。同社の板碑群がコンクリートで固定されたのは、それ以降だといえる。

今回の調査では、前述のように3基の板碑(㉗~㉙)の後ろ側に、板碑片2基(㉚・㉛)を確認できた。次に、それらについて調査した成果を整理しておきたい。まず、板碑片㉚は高さが最大15.1cm、幅18.8cm、厚さは2.0cmである。板碑片㉛は、高さが最大9.0cm、幅14.2cm、厚さがやはり2.0cmであった²³。

この板碑片2基は、㉗~㉙の断片である可能性もあるが、㉗は幅28.4cmで厚さ2.4cm、㉘は幅24.0cmで厚さ2.0cm、㉙は幅19.2cmで厚さ2.4cmである。㉘の厚さは㉚・㉛と符合するが、幅は大きく異なる。㉚は上部だけではなく左側も欠損していると思われ、本来の幅が不明だが、㉛は上部が欠損しているものの、左右の側面は欠損がないようである。少なくとも板碑片㉛は、㉗~㉙とは別の板碑ではないかと思われる。㉚と㉛が一つの板碑であった可能もあるが、判然とはしなかった。だが、志村熊野神社には、『板橋区史』に掲載される3基以上の板碑が存在したと考えられることは、指摘できよう。

18



(『住宅地図 東京都板橋区』ゼンリン、2014年より作成)

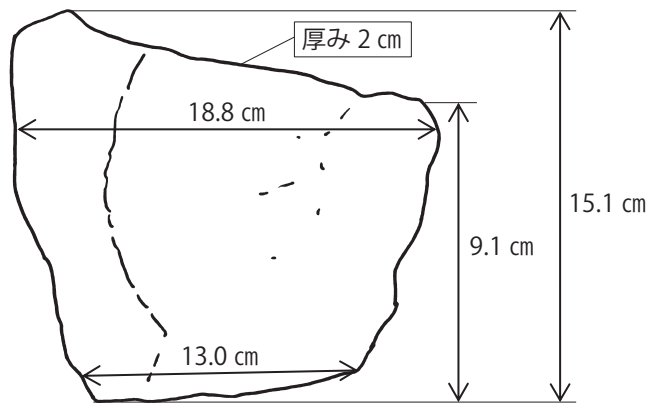
【図21：志村熊野神社境内における板碑の位置】



【写真22：現在の板碑群】



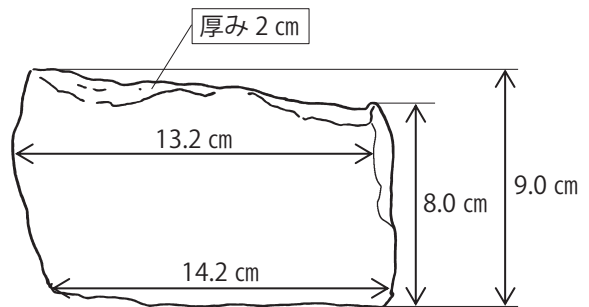
【写真23：板碑片㊦】



【図22：板碑片㊦の計測図】



【写真24：板碑片㊧】



【図23：板碑片㊧の計測図】

おわりに

本稿では、本年度の授業「日本地域史」の概要を述べた上で、調査で新たに確認された石造物について考察を加えてきた。調査成果の要点を記せば、次の通りである。

志村延命寺では、板碑と五輪塔の調査を行った。板碑は、『板橋区史』刊行後、同寺に移し建てられた板碑が9基あり、そのうち5基は既に板橋区教育委員会で把握し、銘文の読解や計測も行われて『年報』で報告されている。そのため『板橋区史』『年報』、またそれ以前に出版された『板碑』の情報を一覧表に整理し、配置図を作成して、各書籍と現況の対応関係を明確にすることとした。今回、存在が明らかになった板碑を含め、『板橋区史』に見えない9基は写真を掲載し、現況を把握しやすくした。

五輪塔については、今回の調査でその存在が初めて明らかとなった。購入によって他所からもたらされた可能性もあったが、境内における配置を図に示し、法量を計測して銘文があるものは、拓本を採って読解を試みた。形状から、中世五輪塔の特色を備えた貴重な資料であると考えられた。

また、前野町の東熊野神社では板碑1基を発見し、志村熊野神社でも板碑片2基を確認した。前者については銘文があったため、拓本を採取し、何れについても法量を計測して実測図を示した。特に東熊野神社は新たな板碑が発見されたが、既に日露戦争の頃には同所にあったものと考えられる。板碑は明治維新期の神仏分離によって、または同社の近隣にあった道標や合祀された神社などのように、近代以降に同社へ集められたことも想定すべきであろう。だが板碑は、道標や合祀された社からは離れたとこ

ろに位置し、「日露戦役記念碑」と併設されていることから、記念碑設立にあたって発掘された可能性もある。もしそうであるならば、同社の地が中世段階においても信仰の対象となっていたと考える余地も残されている。このように、今回の調査では中世の石造物が新たに発見されるなど、研究史的にも意義のある成果を出すことができた。

最後に、フィールドワーク授業を実施したことによる、教育面での成果と課題についてもまとめておきたい。今回は、調査地も含めて学生が調べ、プレゼンテーションを行って調査地を選び、グループで調査を進め、報告書を作成するなど、終始アクティブラーニングを取り入れた。これにより、学生が主体的に学ぶ姿勢を見ることができた。また、本授業では異なる学年の学生が一堂に会してグループワークを行ったが、その中でリーダーシップをとれる力を育き、各自の特色を生かしたチームワークを良くするための工夫も学ぶことができたようだ。プレゼンテーション能力や、文献の収集力、調査の作法や報告書を作成する能力も、学生同士で協力し合いながら身に付けることができた。そしてささやかではあるが、新たな歴史的発見を体験したことで、歴史学を学ぶ意義についても考えを深めることができたと思われる。

一方、課題もいくつか残された。例えば、異なる学年同士では、授業時間外でグループワークをする時間を設定することが難しいとの意見があった。また、筆者が授業期間内に『報告書』の内容を充分に確認する時間が取れなかったこともあり、その後の確認作業で『報告書』の誤りがいくつか見つかるなど、『報告書』の内容に不十分な面があった(本稿では訂正を加え、注などで詳細を明示した)。調査内容によっては教員の指導・監督が必要であったため、グループごとに調査日を変更し、それら全てに引率をした結果、教員側の授業数が15回では収まらないなど、教員の負担が大きいという問題もあった。

初の試みであったこともあり、いくつか課題も残されたが、グループ作りや調査先の設定を工夫し、確認作業の時間を充分にとることで改善していくことができるであろう。今後も板橋の歴史を追究していくとともに、フィールドワークを生かした授業方法も模索していくこととしたい。

〔謝辞〕

本年度の授業を進めるにあたっては、多くの方々にたいへんお世話になりました。板橋区教育委員会文化財係の吉田政博氏・畠山聡氏、延命寺の住職斎藤義宏氏、前野町東熊野神社、板橋区公文書館の西光三氏をはじめ職員の皆様、そして地域の方々に、厚く御礼申し上げます。

【註】

- 1 課題に取り組む期間は、第1回目と第2回目の授業の間が、課外授業による振替日のために1週空いており、2週間あった。
- 2 『板橋区史』以後に増えた板碑は、2015年度に板橋区文化財として登録されている。詳細は、板橋区教育委員会生涯学習課文化財係編『板橋区文化財年報12(平成26年度・27年度)』(板橋区教育委員会、2016年)に詳しい。
- 3 特に五輪塔の計測時には、藤沢典彦・狭川真一編『図説 石塔調べのコツとツボ』(高志書院、2017年)などを参照した。
- 4 前述した畠山聡氏の解説による。
- 5 本授業で使用したループリックは、本学部歴史学科の三宅俊彦氏が作成し、ご提供下さったデータを基に、本授業用に変更を加えたものである。三宅氏には、この場をお借りして御礼申し上げたい。
- 6 板橋区教育委員会事務局社会教育課文化財係編『文化財シリーズ第三十九集 いたばしの寺院』(板橋区教育委員会、1982年)。

- 7 前掲註(2)書。
- 8 『報告書』掲載の情報・写真が間違っているため、ここで訂正しておきたい。
- 9 『報告書』掲載の情報・写真が間違っているため、ここで訂正しておきたい。
- 10 『報告書』掲載の情報・写真が間違っているため、ここで訂正しておきたい。
- 11 前掲註(2)書。
- 12 岩田芽依・坂本和希「延命寺の五輪塔の調査結果」(『報告書』所収)。
- 13 岩田芽依・坂本和希「延命寺五輪塔の梵字について」(『報告書』所収)。
- 14 図5・6・8・11・12・14・16の梵字は、『板碑』から転載。
- 15 図7・9・10・13・15の梵字は、徳山暉純『図説 梵字』(木耳社、1974年)から転載。
- 16 岩田・坂本前掲註(12)報告。
- 17 岩田・坂本前掲註(12)報告。
- 18 岩田・坂本前掲註(12)報告。
- 19 岩田・坂本前掲註(12)報告では、五輪塔㉔の計測図と㉕の計測図が誤って入れ替わっている。図4が五輪塔㉕(『報告書』では五輪塔④)、図5が五輪塔㉔(『報告書』では五輪塔③)の計測図である。
- 20 吉田政博「豊島郡・豊島氏と熊野信仰」(板橋区立郷土資料館 吉田政博編『特別展 豊島氏とその時代—中世の板橋と豊島郡—』板橋区郷土資料館、1997年)。
- 21 『いたばしの神社』(板橋区教育委員会、1981年)、蘆田伊人編『新編武蔵国風土記稿』第一卷(雄山閣、1970年)。
- 22 『報告書』では、永正13年(1516)銘の板碑と大永6年(1526)銘の板碑の写真が入れ替わっているため、ここで訂正しておきたい。
- 23 『報告書』では、㊦の幅を12.5cmとするが誤りであり、ここで訂正しておきたい。